

【報告】

川畑賢矩さんへ感謝状

本町の川畑賢矩さんは高齢等のため、やむを得ず二十八年に亘る垂水史談会会員を辞められることになりました。平成五年に垂水史談会が復活して以来、ご自宅が本町の旧家でもあることから戦中戦後はもとより藩政時代のことがらまで、文字通り「生き字引」として史談会をけん引してきてくださいました。

十一月二十日ご自宅にて、町田猛会長から感謝状を贈呈いたしました。これからも夫婦でお元気で過ごしてください。



文化財周辺の整備や草刈りを行いました

十一月十四日、垂水島津家草創期の家老・川上忠實（周賢）の墓碑の前の土手に階段を作り、また入口の急坂のロープを新しくかけ替えました。

川上忠實は垂水島津家の家老として、二代以久、三代彰久、四代久信（相模守）に仕えました。鹿児島はもとより、肥前（長崎）での龍造寺氏との戦い、文禄慶長の役の朝鮮での戦い等に目覚ましい活躍を果たしました。しかし、垂水家の後継問題で四代久信の怒りに触れて非業の死を遂げ、当地の福寿寺に葬られました。さらに、新御堂の「孝子市太郎の墓」周辺の草刈りも行いました。

二十二日の垂水高等学校の史蹟巡りを控えて事前準備が整いました。作業は会員の川崎あさ子、堀内健三、新原清実、瀬角龍平が参

加しました。



垂水高等学校、史蹟巡りを実施

十一月二十一日、垂水高等学校では恒例となった史蹟巡りを実施しました。学校では毎年コースを違えて実施していますが、今年の水之上方面へのコースで約十八キロメートルを全校生徒でめぐりました。

当日はあいにくの小雨模様でしたが、生徒たちは傘を差しながら最後まで踏破しました。

コースには牧の薬師如来、川上忠實の墓碑、勝軍地蔵、孝子市太郎の墓、島津家墓地、お長屋などの文化財があります。各チェック地点では垂水史談会の山田義之、川崎あさ子、瀬角龍平の三名が待機して、生徒たちに説明しました。また、手貫（上之宮）神社では氏子代表の神柱利雄さんからも説明をしていただきました。



【研究ノート】

柏木重住之墓 ②

— 垂水市新城、末川家墓地南隣 —

【転写】

賊勢猖獗 獬築礮墩 連發砲銃 將燬城城 中硝丸乏 糧食少衆 皆圖不可 支或截髮 以托親友 或作絕命 之詞以待 天明乃出 城切齒憤 怒砲戰移 時煙焰漲 天彈丸迸 地宛如雷 霆震遂官 軍散乱或 有陷伏爲 擒者或有 屠腹死者 蓋君戰沒 於此日實明治七年甲戌二月十八日也享年二十七嗚呼三年竭心 骨以有待之身一朝死不測之難其志可悲矣雖然君歿後未幾賊魁 伏天誅梟首於獄門其可以瞑也父柏木重安君將建墓有日請余銘 余不文雖不足以垂不朽不顧譴陋畧叙其顛末以爲之銘銘曰

於戲男兒 爲王事歿 悠悠千載 芳名不竭

明治八年乙亥十一月十五日 中村清雄謹撰并書



【読み下し】

賊の勢い、猶お猖獗し礮墩を築き、砲銃を連発し將に城を燬かんとす。城中に硝丸乏しく糧食少し。衆、皆な支うべからざるを因り、或いは髪を截り以て親友に托し、或いは絶命の詞を作り以て天明を待てり。乃ち城を出て、切齒憤怒す。砲戦時を移して煙焰は天に漲り、彈丸は地に迸る。宛も雷霆の震うが如し。遂に官軍散乱し、或いは陥伏して擒と爲る者有り。或いは屠腹して死する者有り。蓋し君も此の日に戦没するならん。実に明治七年甲戌二月十八日なり。享年二十七。

嗚呼三年、心骨を竭し、有待の身を以て一朝、不測の難に死す。其の志悲しむべし。然りと雖も君の歿後、未だ幾くならずして賊魁、天誅に伏し、獄門に梟首せらる。其れ以て瞑すべきなり。父の柏木重安君、將に墓を建てんとして日有り。余に銘を請う。余、不文にして以て不朽に垂るる



に足らずと雖も譴陋を顧みず、略、其の顛末を叙べ、以て之が爲に銘す。銘に曰く、

於戲、男兒は王事の爲に歿す。悠悠たる千載も芳名は竭きず。

明治八年乙亥十一月十五日

中村清雄、謹んで撰し并びに書す。



【注】

○猖獗・勢いが盛んで荒れ狂うこと。○礮墩・大砲を固定してある陣地、砲台。○硝丸・火薬と弾丸。○絶命之詞・死ぬ前に残すことば、文章。辞世の詞。○天明・夜明け。○雷霆・かみなりといはずま。○屠腹・腹を切つて自殺する、切腹すること。○有待之身・凡夫の身。すべて他の助力により食物、衣服等の資をまっして生存する義。○賊魁・賊軍の首領。江藤新平や島義勇ら。○梟首・さらし首。○有日・何日か経過すること。○譴陋・あさはかで知識がせまい。○銘・亡くなった人物のことを追悼し、称える比較的短い韻文。墓誌(墓碑)のあとに刻まれる。五言や七言のほか、四音で構成されている銘も多く、墓碑とともに文学作品としても優れたものがある。○芳名・ほまれ高い名前。○明治八年・一八七五年。○中村清雄・不明。○撰・文章を作ること。

【お知らせ】— どなたでもご参加ください —

毎月第四水曜日午後六時半から、垂水市民館で垂水の郷土史や文化財などについて、定例の勉強会を行っています。『垂水市史』の読み合わせが基本ですが、資料を持ち寄つての勉強も行っていきます。また、市内に残る文化財や史跡めぐりなど、現地研修を行うこともあります。

【漢詩の口語訳】
ああ、男兒・柏木重住は、天皇陛下の覇業である佐賀の乱の鎮圧に従事して没したのである。
時は遙かに千年を経ようとも、誉れ高き柏木重住の名は尽きることはない。
(この稿おわり)

— たるみず春秋 —

不機嫌なバスに一人や風芒

桑島信子

この作品を読んで、少し頬がゆるんでしまいました。昔は路線バスでもどこか不具合のものが走っていましたが、いまはピカピカの冷暖房もばっちりです。スマートなバスが多すぎます。

作品を読んで、まだこんなバスが生き残っていたという安心感があります。「不機嫌な」という言葉のすえ方も面白い。乗客が作者一人だったのも幸いでしたね。普通では味わえないバスの機嫌の悪さを体験できたのですから。

(文章・瀬角龍平)